

2010年3月14日

文責 藤井良太

概要

京都府立大学山岳部の2008年GW合宿において、黒部・内蔵助平に入山していた部員3人のパーティ（伊藤・安西・竹中）が、5月5日の行程（丸山中央山稜～真砂尾根）の下山の際に、パーティが分離し帰幕が遅れ、1・2回生の安西・竹中だけが悪天候の中、真砂尾根の支尾根上でビバークするというトラブルが起きた。翌6日に、同山域に入山していた八ッ峰パーティ（藤井、渡辺、国石）が救出に向かい、2人は無事に下山することができた。

このとき、内蔵助平組のリーダー伊藤の行動が問題になり、山岳部では遭難未遂と位置付け、問題点と反省点について、5月8日に反省会を開き、部員および関係者で話し合った。伊藤の行動に過失があったのは明らかであり、伊藤の謝罪をもって山岳部として受け入れることとなった。

詳細

5月2日から始まった山岳部GW合宿は5月4日まではほぼ予定通り進んでいた。計画は、剣岳八ッ峰を登るパーティ（L藤井3・渡辺OB・国石（京大山岳部OB））と内蔵助平周辺で雪上訓練を行うパーティ（L伊藤コーチ・安西2・竹中1）に分け別行動をするというものだった。前夜に京都を出発して伊藤の車で扇沢に着いた。※数字は当時の回生

3日に全員で扇沢からトロリーバスで黒部ダムに着き、八ッ峰組は一足先に八ッ峰に向けて出発、内蔵助組は新人竹中の指導をしながらゆっくりと内蔵助平に向かった。内蔵助組は内蔵助平で幕営後、付近の斜面で雪上訓練をしていた。

4日、内蔵助組は雪上訓練を兼ねハシゴ谷乗越から黒部別山北峰までピストン登山をした。

天気はこの日まで良好だった。パーティは互いに定時無線交信を行っていた。

5日、八ッ峰組は雪の少ない尾根を登って八ッ峰I峰に着いたものの、時間がかかりすぎたため敗退することになっていた。扇沢を下り16時ごろ内蔵助平に到着。天気は、主稜線だけガスって強風が吹いており、全体には曇りだった。午後からは小雨になった。

内蔵助組は、予定通り内蔵助中央山稜から富士ノ折立をアタックして真砂尾根を下っていた。内蔵助山荘辺りから、雪が悪くなり、パーティの進捗が落ちる。伊藤が先導し始める。

16時の定時交信で、内蔵助平組の伊藤から藤井へ「下山が遅れていて暗くなりそう」と連絡が入った。八ッ峰組は心配しつつも待っていたら、再度18時の交信で「二人が下りてこなくなった。ビバークさせる」と入った。八ッ峰組は「救助に向かう」と伝え無線を開けたまま準備をして、18:30頃に国石・藤井が内蔵助組のもとへ向かう。辺りはすでに暗くなっていた。ずっと雨が降っている。伊藤に合流して状況を聞く。後でわかったことだが、真砂尾根上部からは伊藤が先を歩き、安西と竹中が盲目的にトレースを追従する形になっていた。尾根後半でのコミュニケーションは皆無だった。伊藤は近道として、主尾根から支尾根に下り、雪溪に下りたが、安西らは支尾根のブッシュ帯で伊藤のトレースを見失っていた。そして安西らはロープを使い1ピッチ懸垂下降をしたが、ロープの回収ができず、留まるしかなかったようだった。

真砂尾根支尾根末端の雪溪右岸の藪の中にライトが二つ見えた。伊藤によると、竹中・安西の2人はブッシュ帯で伊藤のトレースを見失い変な方向に下りてしまい、こちらから姿は見えてもコールは届かないという状況になったようだ。早速向かおうとして藤井が片方のアイゼンをなくし余計な時間を食った。体力をかなり消耗していた伊藤はいつの間にかテントに戻っていた。国石・藤井は伊藤の指示に従って、アンザイレンし支尾根に取り付いたが、暗闇とブッシュ

に阻まれ登れず、右の雪渓に逃げた。トラバースで少し歩くと藤井のコールが安西に届いた。安西のライトを見つけて、位置が分かったが、このまま救出に向かうのは困難な状況だった。安西の声がしっかりしているのでひとまず安心した。竹中は元気で、二人でビバークできると言うので、任せてテントに戻ることにした。

大雨が続いた夜だったが、翌6日の3時ごろには逆に快晴になってものすごく冷えた。このとき安西と竹中は木に座ってセルフをとったままツェルトをかぶって夜明けまでひたすら我慢していた。藤井・国石・渡辺が、快晴の夜明けとともに救出に向かったが、伊藤は体力の消耗を理由にテント場に残った。

昨夜の雪渓をつめていくと赤いザイルと二人の動く姿が見えた。昨夜コールが聞こえた位置から雪面を斜面左上方向に、藤井が1ピッチロープを伸ばして2ピッチ目で国石がようやく二人のもとへ届いた。竹中は寒がっていたがすぐに陽が差してきて暖かくなった。二人に準備をさせ、フィックスで竹中・安西を下ろし、国石もつるべでぬけ、最後に藤井が下りて救出劇が終わった。風雨と寒さに見舞われ、死んでいてもおかしくない一夜だけあって、二人はかなり消耗していたが、元気そうだった。「今度は楽しい山に行こう」などという会話を交わしながら雪渓を下り内蔵助平に向かった。伊藤のもとに2人を連れて行ったあと、藤井は主将として、伊藤に「自分の体力を考えて、助けに行けなくなるなら、そうなる様な判断をしないでください」と怒った。伊藤は、素直に謝罪をした。

2時間ほど休憩してテントを撤収した。

帰り道は、寡雪のため黒部川を通るのは危険と予想し、御前谷野乗越から雪崩に注意しながら御前谷を下った。後立の山々を眺めながら黒部平まで快適に歩いた。黒部平に到着した後は1・2回生の体力を考えて地下ケーブルで下り、全員無事黒部ダムに戻ることができた。

風呂の後の食事の際、再び伊藤は安西と竹中に「すまん、俺が悪かった」と謝罪した。そしてメンバー全員で反省会を行うことになった。

反省会では、登山メンバー以外に、牛田顧問、中島、加藤、栗原が参加した。櫻井は参加しなかった。まずリーダーの行動（過失）について伊藤の謝罪が行われたが、深く責任追求されることはなかった。伊藤は、（こんなことは初めてだったが）自分の全過失であることを認め「すまなかった」の謝罪の一点張りだった。このようなトラブル（遭難）になった要因として、学生側の失敗点（懸垂下降・トレースを見失ったこと）については深く議論された。反省会は、このトラブルの教訓を、学生として活かしていくという方針で行った。

安西は、「自分がトレースを見失ったため下山が遅れた、一回生がいたのに」と、自己反省している様子だった。ここでも伊藤と安西、そして竹中のとらえ方はかなり違っていたように今考えるとそう思われる。藤井は、完全に伊藤に対して不信感を抱いていたが、伊藤の性格は直らないと思い、現役内で「伊藤先生と行くときは学生側で気をつけなければならない」と話していた。話された内容は藤井が要約し反省会報告書としてまとめメールで反省会参加者に送ったが、伊藤からの反応はなかった。

この時に伊藤・安西両氏から（伊藤が大ベテランという実績があったとしても）反省文という形で自己分析と二度と繰り返さない約束をさせ、報告書をより多くの人に公開していくべきだったと、当時の主将として反省している。

このトラブルは、今回の鳴沢岳遭難事故と比較しても、伊藤というリーダーやパーティの状況について、十分に関連性を持っていることが推測される。この時の反省・責任追及が十分でなかったため、今回の事故につながった可能性は非常に大きいと考えている。